

《正岡子規 (36) の続き》 その306

天涯茫茫生

下村為山 (続々々)

為山が郷里を出て上京、いくつかの画塾を転々としながら画業に打ち込んでいるうち、旧藩主久松氏が藩の子弟のために建てた寄宿舎の監督をつとめていた従兄の内藤鳴雪を訪れるうち、舎生の子規を紹介されて知り合いとなり、俳句の道に導かれることとなった。牛伴と号して子規庵の句会にも列した。

ここに掲げた画は、為山の描いた子規庵の句会の図である。題して「子規庵に於る或日」とあり、執筆は昭和十年秋である。即ち殆んど40年前を回想しての子規庵の句会出席の面々の面影を写したものであるが、画家の記憶のたしかさを確認させるものである。

この画に碧梧桐が添えた文を書き写してみよう。この文も記憶のたしかさを証明する。

明治三十年頃より／子規居士傘下に集る／同人一党日に月に新人を／迎へ例月根岸子規庵に／於る句会の意気常に冲天／の概を示せり

牛伴画伯の作写生図八／明治三十一年頃新年／発会の光景なるべく／鳴雪の披講各自採点之状／約四十年を隔てて当時を目睹

／せしむ眞に珍中の珍というべし
画中之人物既に故人となれる者／子規居士と共に十名曰く

内藤鳴雪 坂本四方太 石井露月

梅沢墨水 数藤五城 大谷繞石

吉野左工門 諫早季坪 村井愚哉

而して今日尚ほ健在なる／者も多く白頭霜鬢既に／老境に入る当時を追想して／多少の感慨なしとせんや

碧梧桐 識

図中の人物の俳号を記すと、左上方の子規より時計まわりに以下23名。括弧内に姓を記した。

(正岡) 子規、(石井) 露

月、(佐藤) 肋骨、(河東)

碧梧桐、(坂本) 四方太、

(内藤) 鳴雪、(佐藤) 紅

緑、(高浜) 虚子、(大谷)

繞石、(吉野) 左工門、(五

百木) 瓢亭、(梅沢) 墨水、

(数藤) 五城、(赤木) 格

堂、(小林) 季坪、(折居)

愚哉、(中村) 牛伴、為山、

(寒川) 鼠骨、(福田) 把

栗、(山田) 三子、(飛念なが)

活東、(岩田) 鳴求、(松下)

紫人。



「子規庵に於る或日」 下村為山畫 (昭和十年秋)

これだけ多数の俳人とその風貌を記憶し、それを写し出す描写力には感嘆の外はない。鳴雪の有名なあごひげまで描かれている。牛伴自身の口ひげも勿論である。

為山の写真は、講談社版「子規全集」の第4巻と第5巻の巻頭の集合写真のなかのひとつとして、子規と共に写っている。なかなか雄偉の人物に見える。